

「授業評価」の実証効果：生態学的視座からの再考

笹尾敏明・池田満・佐藤信一
(国際基督教大学)

【目的】 ファカルティ・ディベロップメント(FD)の中核のひとつは言うまでもなく学生による授業評価である。近年では授業評価がFDの同義語であるかのごとく、授業評価の実施と学内外への公表を行う大学が急増している。最近では授業評価の実施と集計、分析を専門で行う業者も生まれ、大学として人的、時間的資源を労せずには実施が可能となってきたという事実も、授業評価実施の促進に拍車をかけている。

授業評価の一般的手順としては 1)学生からのデータ収集および分析と 2)教員(あるいは学生)へのフィードバック、さらに大学によっては 3)結果に対する教員からのコメントや改善案の提示などを行っているところもある。しかしこのような授業評価の運用にはいくつかの問題点が挙げられる。一つ目は生態学的視座の欠如である。生態学的視座とは、個人の認知や行動の原因を単純に個人に帰するのではなく、個人と環境の相互作用の中で捉える視点である。学生による授業評価を「授業に対する学生の認知」と考えた場合、学生の認知が教員の授業方法のみによって形成されるとは考え難い。教員の持つ要因とともに、授業を取り巻く他の様々な外的要因(クラスサイズ、必修科目か否かなど)の影響も考える必要がある。それにも関わらず授業に対する学生の認知が教員のみによって形成されたとすることは、教員に対する犠牲者攻め(Victim Blaming: Ryan, 1971)につながり、教員のバーンアウトなど、更なる授業内容の低下を招く恐れがある(笹尾・小山・池田, 2003)。二点目としては、データの十分な分析と解釈の不足が挙げられる。実施状況の詳細を見ると多くの場合、学生の回答傾向を記述的に表現するにとどまり、回答の内容、その内容を生み出しうる要因との関係など、多角的に分析する例はあまりない。また適切なデータ解釈を行わずに教員へフィードバックを行うことが、回答の原因を教員に帰し犠牲者攻めを行う素地ともなっている。

そこで本研究では、過去に国際基督教大学(ICU)で実施された学生による「授業効果調査(TES)」から、学生や教員という要因だけでなく授業規模などの環境レベル要因と、それらの相互作用が学生の授業認知に与える影響について再検討を行う。さらに既存の授業効果調査の再分析を通して、学生による評価を多角的に分析する例を提示するとともに、既存の調査の有効性と限界について考察し、今後のFDにおける「授業評価」の役割及び位置付けを検討する。

【方法】 TES は各学期の最終授業時に学生が無記名で記入した。回答時には教員は退出し、回収は学生ボランティアによって行われた。TES は(A)授業全体に対する評価、(B)教員に対する評価、(C)教室環境に対する評価、(D)学生自身に関する評価、および回答者の属性に関する質問(性別、学年、所属学科など)で構成されている。

本研究では階層線形モデル(HLM)を用いて、2000年度春学期、および2001年度春、秋学期に実施されたTESのデータから教育学科心理学専修から開講されたコースを取り上げて分析を行った。このうち3学期間継続する演習科目(心理学研究法)と、非常勤教員が担当したコースは分析の対象としなかった。分析にあたってはTESの(A)授業と(B)教員への評価を従属変数とし、学生の属性として学年と教育学科か否か、各クラスの属性として登録学生数と教員を独立変数とした。

【結果】始めに級内相関(ICC)¹を求めたところ、全体の分散のうち、授業全体の評価では 10% (Adjusted ICC=.103)、教員評価では 19% (Adjusted ICC=.19.2)がクラスの差異によって説明された。次に、1) レベル 1 に学生属性、2) レベル 2 にクラス属性のうち登録学生数、3) レベル 2 に教員を漸次投入したモデルそれぞれの級内、級間分散を表1に示す。相対的に大きな変化としては、授業評価において教員投入後に級間分散が.013 上昇し、また教員評価において登録学生数投入後に級間分散が.024 減少した。しかしすべての変数を投入した後も、いずれの級間分散も有意であった。一方、各独立変数の係数は、教員評価における登録学生数の効果のみが有意だった： $\gamma_{01}=.004$, $t(10)=2.618$, $p<.05$ 。

【考察】本研究では調査結果に影響を与える要因として、学生レベル変数のうち学生の学年と所属、クラスレベル変数として登録学生数と教員を想定し分析を行った。これは TES で得られているデータのうち、そのほかの変数(学生自身の評価など)は、授業評価や教員評価やなどと相互作用が予測され単純な因果関係が同定しづらいと考えられたためである。そのため本研究では客観的な指標のみを取り上げて再分析を行ったが、いずれの従属変数においても、本研究で取り上げた独立変数は、級間分散を十分に説明することはできなかった。また各独立変数の効果に関しても、登録学生数の効果が有意ではあったが、その影響は非常に小さかった。

本研究から得られる示唆は大きく2つ考えられる。第一に、学生レベル変数が持つ効果の大きさは、クラスによって異なるということである。これまでの研究では学生の様々な属性(学年、所属、性別など)の影響を指摘しているが、その影響はクラスごとに異なり一元的に捉えることはできない。第二に、教員の持つ影響を過大視するべきではないといえる。本研究では単純に教員の相違のみを変数として取り上げ、教員の質的相違を勘案しなかった。しかし同じ教員が行う授業であっても学生の認知には個人差があり、単純に一般化することが困難であること示している。実際、TES にある学生の自由記述では、たとえば授業中にグループワークを多用すること対して、賛否両論のコメントがあり、学生との相互作用という視点の重要性が再確認された。

学生からの評価を含めた FD の普及という第一段階を終えつつある現在、手法の洗練という第 2 段階へ進むために何ができるかを考える必要がある。そのためには、目的化された授業評価ではなく、よりよい大学教育をもたらすための資料という新たな(本来の)授業評価の形を考えなければならない。現在一般化している授業評価は、学生の授業認知の傾向を知る手段にとどまり、よい(悪い)授業をもたらす要因を知る手段にはなっていない。評価形式の設計段階から、教員、学生と環境の相互作用を、どのような分析方法を用いて読み解くか、十分に考慮する必要がある。

表 1 授業評価と教員評価に関する階層線形モデルの結果

変数名	授業評価				教員評価			
	σ^2	τ_{00}	χ^2	df	σ^2	τ_{00}	χ^2	df
レベル1								
学生属性	.384	.043	54.376	12	.319	.076	91.499***	12
レベル2								
学生登録数	.383	.046	55.287	11	.319	.052	64.745***	11
教員	.384	.051	54.242***	10	.319	.050	52.999***	10

*** $p<.001$

¹ $ICC = \frac{\tau_{00}}{\sigma^2 + \tau_{00}}$ ただし σ^2 : 級内分散
 τ_{00} : 級間分散